小室直樹著「悪の民主主義」青春出版社 1997 年 11 月刊を読む

アメリカ教育の根本は何か

１．（１）①**アメリカ人としての誇りをもたせ、アメリカ合衆国への忠誠心を育てること**である。
②つぎに、**アメリカ人としての生活の仕方を教えること**である。
（２）①これは、どこの国でもそうだが、近代国家は民族国家(nation state)である。
②民族が成立しなければ、国家は成立しようもない。
③しかも、民族は自然に存在するものではない。
④氏族や部族はそのまま民族を形成するものではない。
⑤もろもろの貴族支配は、近代的統一国家と対立するものである。
⑥中世等族国家を民族国家に統一することによって、近代国家は生まれてくるのである。
（３）①民族とは、人間がつくったものである。
②人間の行為による。
③ゆえに、近代国家をつくろうとする者は、民族形成に精根をつくす。

２．（１）とくに、民族教育を重視するのがアメリカ合衆国。
（２）①アメリカは、自由な移民の国であることを国是としてる。
②誰がアメリカにきてもよろしい。
③どんどんいらっしゃい。
④宗教、身分、財産の有無、民族、言語……、一切問わない。
⑤これが大原則である。
（３）①とすれば、アメリカ(合衆)国の要となるのは何か。
②民族教育である。
③民族教育の坩堝の中に投げこんでアメリカ人をつくり上げる。
④もしそうでなければ、移民の国であるアメリカ合衆国は、たちまち解体するであろう。
⑤だから、アメリカは民族教育に全力をあげる。

３．（１）小学校教育でなすべきことは？
（２）①子ども同士がコミュニケーションできるようにすることである。
②自分とちがった意見をもつ人を理解し、自分の意見を伝える。
③コミュニケートできるようにする。
④討論ができるようにする。

（３）①意見の背後には、その人の立場、環境、地域、身分などがある。

②これらがちがっても、言葉、感情が通じあうようにする。

③そのためには、各人が自分の意見を正確に表現することが要求される。

④民族、宗教の壁はけわしいが、それらを乗り越えてコミュニケーションが成立するように努力がなされる。

（４）この教育に多大な時間がとられるから、算術や国語（英語）のような最重要科目さえ犠牲にされることがある。

４．（１）①アメリカの大学の教科目を見て驚くことがある。

②大学に英語と数学の初級コースがあるということである。

③半文盲（half-illiteracy）が高校卒に増加しているのである。

④高校は出たのだけれども、英語が満足に読めない。

⑤もちろんまともに書けっこない。

（２）①日本でこんなことが起きたらたいへん。小学校卒業生だって、読み書き計算が満足にできない子がいたら、学校で何を教えていたのかと大問題になることだろう。

②まして高校である。

③何を教えていたんだって？

５．（１）①まともなアメリカ人になることを教えていたのである。

②誰とでも自由にコミュニケートできること。

③とくに、自分の意見を正確に表現できること。

④他人の意見が理解できること。これができなければ、まともなアメリカ人とはいえない。

⑤一人前のアメリカ人として通用しないのである。

（２）もっと大切なことは、アメリカ人としての誇りをもつこと。アメリカに忠誠心をもつことである。

（３）これらのことを徹底的に体得、体感させるために、アメリカの普通教育（初等・中等教育）は全力を傾注する（そそぎこみつくす）。

６．（１）①この教育目的を達成するために、ありとあらゆるチャンスを利用する。

②そのために、英語、数学をはじめ、一般科目が犠牲にされることまでも、やむをえないとアメリカ人は考えた。

（２）これが、アメリカの教育における根本的な方針である。

日米教育観の違いをカリキュラムが如実に明かす

７．（１）①アメリカ人は、勉強は大学から始まり、研究は大学院から始まると思っている。
②高校までの教育の目的はアメリカ人になることである。
（２）「勉強や研究は、その後でいいじゃないか」――アメリカ人は、こう考える。
（３）①立派なアメリカ人になったら、お勉強は大学から始めましょう。
②今までマンガしか読めなくても結構。
③大学に入ったからには、小説でも新聞でも読めるように勉強しましょう――ということなのである。
（４）①大学へ入ると、英語の試験がある。
②英語が「ほとんどできない人」は週 16 時間、「あまりできない人」は週８時間、「少しはできる人」は４時間……などと英語の授業をとらせられる。
（５）①数学も同様。人によっては、分数計算から教え直される。
②九九から教え直される人は見かけなかったが……。
③それから、代数や幾何も、まったくはじめから教えてくれる。
（６）①なんて言っても、侮ってはならない。
②それまで勉強していないけれど才能のある人もいる。
③代数のはじめからスタートして、１年で線型代数学（行列と行列式）をマスターした人の話も聞いた。
④アメリカならではの話ではないか。

８．（１）①大学は、日本でいえば、ま、教養課程。専門教育は大学院から始まる。
②その充実していること日本と同日の談ではない。
③いや同ミレニウム（millennium）の談ですらない。
（２）①アメリカでは、法律教育と医学教育とは、大学院コースである。
②それぞれ、ロー・スクール（law school）とメディカル・スクール（medical school）とによって、教育がなされる。
（３）①いずれも大学院コースであり、大学（の学部）卒業者が入学する。
②その大学のどの学部卒業者であっても、同じく入学資格がある。
③学部（undergraduate course）には、法学部、医学部はない。アメリカでは、ロー・スクールを卒業すれば司法資格が与えられる。州によって制度がちがうが、全国一律の司法試験というものはない。

９．（１）①法律の教えかたも、アメリカのロー・スクールだと討論方式（case study 事例研究）である。
②先生が、討論のための資料をもってきて、学生に配る。この本のここを読め、あの本のあそこを読め、と読書の割り当て（reading assignment）もする。

（２）①授業では、資料と読書とを前提にして、事例をもってくる。

②こういうことが起きたが、これは法律的にどう解釈するべきか、と質問をするのである。

③学生のあいだでも討論をさせるのである。

（３）①たとえば、人殺しの事例を見せて、これは殺人が、傷害致死か、過剰防衛か……。

②討論と質疑応答をつうじて、学生は、法律的考え方を身につけてゆくのである。

（４）①試験はきびしい。

②せっかく入学しても、ついてゆけなくて落伍する者が多い。

③卒業条件はうんときびしい。

（５）①だが、めでたく卒業すれば、司法資格が得らえる。

②弁護士になれるし、やとってくれれば、検事にも裁判官にもなれる。

（６）①ハーヴァード・ロー・スクール出身者は、弁護士事務所に入所するときには、他のロー・スクール出身者に比べて給料は高い。

②能力が、より高いと推定されるからである。

③が、能力が低いことが分かれば、給料はみるみる下がっていく。

（７）アメリカだと、司法界で上りつめた人の学歴を比べてみても、あまり有名でないロー・スクール出身者が多い。

＜コメント＞

戦後日本の教育はアメリカの教育をお手本にして、そのまま行っていると言われて久しい。では、日本の教育の本家といわれるアメリアではどのような教育が行われているのか、知る必要がある。

2024 年 8 月 12 日(月)

林　　明　夫